

宇宙生命哲学

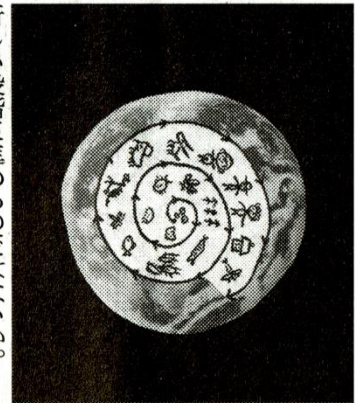
ことばはじめ

北里環境科学センター
理事長／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

生命の起源 ③

太陽系誕生から7〜8億年をかけて、地球の気温は生命活動に適する程度まで下がり、放射能は減衰し、酵素作用を持つ化合物群が蓄積し、細胞様構造物が形成され、地球環境全体が生命の誕生に適した状態になったと考えよう。地球は、何回もの失敗を繰り返した後、やっとの事で生命を生み出した。この時が、真正正銘の生命の誕生と考えて良いだろう。ここで大切なことは、新しく生まれた生命の母体は何かということである。生命を生み出すことにより、その母体自身が生命になったと考えるのはどうだろうか。地球環境そのものに命が吹き込まれたと考えるのである。地球上で生まれた若い生命は、母体の中で進化を繰り返して、知的生命体に進化して、現在に至っている。地球上の生命現象を定義するときに、その生命現象の全てが、地球環境という類い稀な母体の中で循環しているという事実を忘れてはならない。つまり、地球上の生命現象は、全て環境で繋がっていて、その中で循環する時空を超えた高次元の環境生命体の活動だとする概念である。地球のある特定の部分が生命誕生に関わったのではなく、地球丸ごとの環境が生命誕生に必須のことであったと考えることにより、生命の起源の研究は



暗黒の宇宙に浮かぶ
高次地球環境生命体

新しい段階に進めるのではないか。

近年の生命の起源研究には、ある種の閉塞感が漂っている。このテーマは、人類に残された最難関の研究課題の一つで、その難攻不落の城塞の前で、多くの研究者が攻めるべき方向を見失い、研究の焦点が地球外、あるいは太陽系外の惑星へと向かっている。

パンスペルミア説では、彗星に有機化合物のスペクトルが観測されたことを根拠に、宇宙は生命で溢れているとか、地球上の生命は地球外から飛来したなどと、論じられている。この説の中では、無生物の環境からどのような段階を踏んで生命が誕生したかという最もスリリングで興味深い課題に対して正攻法で説明されていない。

地球環境は、億年単位の産みの苦しみの後にやっとの事で生命を生み出したのである。この宇宙の歴史上最大の出来事が、どのようなドラマであったのかを解明するためには、科学の様々な分野の研究者が一堂に会し、総力を挙げて取り組まなければならない。その際、宇宙生命哲学的視野が必要であると思っている。